

高岡市埋蔵文化財調査概報第13冊

八丁道遺跡調査概報Ⅲ

—八丁道歴史的景観整備事業に伴う平成元年度の調査—

1990年3月

高岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は、高岡市建設部道路課による八丁道歴史的景観整備事業に伴う、八丁道遺跡（旧八丁道）の調査の概要報告書である。
2. 当調査は、高岡市建設部道路課の委託を受けて、高岡市教育委員会が実施した。
3. 調査地区は、富山県高岡市芳野に所在する。
調査期間は、平成元年5月10日から5月31日までである。
4. 当調査は、高岡市教育委員会社会教育課文化係文化財保護主事山口辰一が担当し、社会教育課長上田七郎、文化係長河合甚郎が総括をした。
5. 本書は、山口がまとめた。

目　　次

例言

目次

I 序　　説	1
1. 遺跡概観	1
2. 調査に至る経緯	3
3. 発掘調査の経過	3
II 調査の概要	6
1. 各調査地点の設定	6
2. 第8地点	7
3. 第9地点	8
4. 第10地点	9
III 結　　語	10

図 版 目 次

図版 1 遺構 1. 第 8 地点参道部全景 (西)	図版 5 遺構 1. 第 9 地点北部全景 (南)
2. 第 8 地点参道部全景 (北東)	2. 第 9 地点北部近景 (北東)
図版 2 遺構 1. 第 8 地点参道部近景 (南東)	図版 6 遺構 1. 第 9 地点南部全景 (西)
2. 第 8 地点参道部近景 (東)	2. 第 9 地点南部近景 (北)
図版 3 遺構 1. 第 8 地点北側側道全景 (東)	図版 7 遺構 1. 第 9 地点南部近景 (北東)
2. 第 8 地点北側側道全景 (南)	2. 第 9 地点南部近景 (北西)
図版 4 遺構 1. 第 8 地点北側側道近景 (北東)	図版 8 遺構 1. 第 10 地点南半部全景 (東)
2. 第 8 地点北側側道近景 (北)	2. 第 10 地点南半部全景 (北西)

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図 [1] (1/5 万) ----- 1	第 5 図 調査地区配置図 (1/2,000) ----- 6
第 2 図 遺跡位置図 [2] (1/1 万) ----- 2	第 6 図 第 8 地点土層断面図 (1/80) ----- 7
第 3 図 調査地区位置図 [1] (1/5,000) ----- 4	第 7 図 第 9 地点土層断面図 (1/80) ----- 8
第 4 図 調査地区位置図 [2] (1/5,000) ----- 5	第 8 図 第 10 地点土層断面図 (1/80) ----- 9

調査参加者名簿

発掘

上田順子、岡島敏雄、丁幸子、藤野広義、島田英子、船木悦子、松井弘子、水外一郎、向しみ子、宮下真知子、吉久恵子

整理

上田順子、丁幸子、島田英子、船木悦子、松井弘子、宮下真知子、吉久恵子

I 序 説

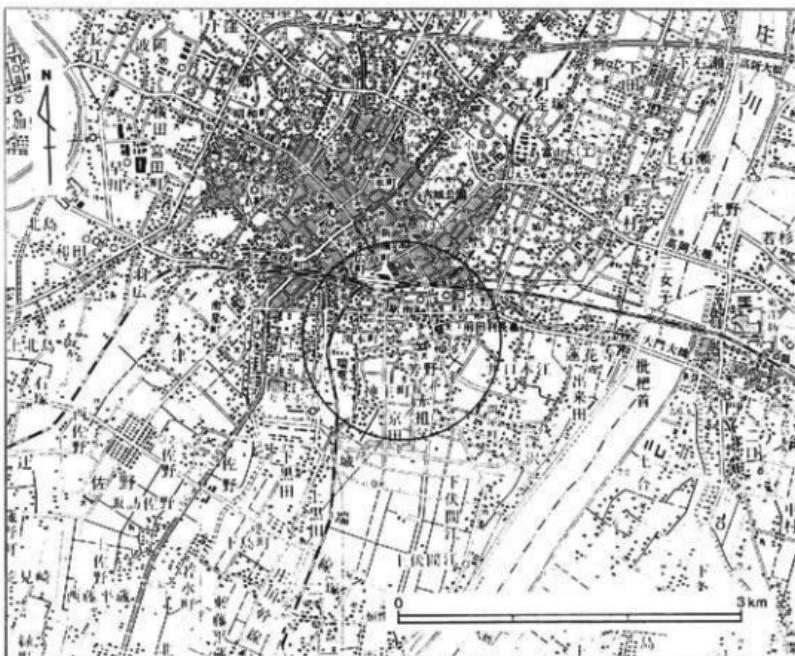
1. 遺跡概観

八丁道（はっちょうみち）は、加賀藩の2代藩主前田利長の菩提寺である瑞龍寺と、その廟所である前田利長墓所（以下「前田墓所」と称する）とを東西に結ぶ参道である。

瑞龍寺と前田墓所との距離が、約8町（約870m）あるところから八丁道と呼ばれている。

瑞龍寺の草創は、1613年（慶長18年）の広山惣陽による。法（宝）円寺の造営まで遡る。この寺は、1614年に前田利長が死去した折に、その法名をとって瑞龍寺と改名された。

1645年（正保2年）、前田利長の33回忌を翌年に迎えるに当たり、加賀藩の3代藩主前田利常は、瑞龍寺の改造に着手した。今日も東面する壮大な伽藍を誇る瑞龍寺の建立である。



第1図 遺跡位置図(1)(1/5万)



第2図 遺跡位置図(2)(1/1万)

この瑞龍寺の改造と共に、前田墓所も、東北東約1kmの地点に造営された。そして、この両者を結ぶ参道である八丁道も築造されるに至ったのである。

現在の瑞龍寺は、仏殿・法堂を中心に曹洞宗の典型的な伽藍を伝えている。かっては、二重の堀で囲まれた3万3千坪余りの寺域を有していた。一方前田墓所も二重の堀で囲まれた5万坪を占める広大なものであり、往々に面した側には堅固な石垣を築いたといわれている。これらを結ぶ八丁道も、南面あるいは北面を石垣で固めたとされている。

前田利長によって開かれた高岡城は、1615年(元和元年)の「一国一城の令」により、廃城となった。しかし、濠壁は原形のまま残り、城下町も商業の町として存続することになった。一方、この旧城下町の南側に構築された、瑞龍寺・八丁道・前田墓所は、必要な場合、南方の防衛拠点としての機能を果たし得るものであったとの解釈もなされている。

江戸時代の諸史料からは、八丁道の両脇は、松並木となり、石灯籠が立てられていたことが窺われる。この中の一つ『真龍院君御道の記』には、「道の程左右に松の並木陰しけり石の灯籠立つらねたるなど物さひたり」と記されている。石灯籠が一町毎左右に立てられていたと伝える史料もあり、この石灯籠については、前田墓所内のものも含めて58基とする記録が多い。

明治8年、樹木が伐採され、それによっていつの間にか道幅も狭くなり、石灯籠も次第に紛失していった。大正2年、古城公園(高岡城)や桜馬場公園の整備と共に、八丁道も整備され、塩釜桜・八重桜の苗木が植えられた。そして道幅は狭いが春になると桜が生い茂る散策道となり、多くの人々に楽しまれる道となった。

その後、各種の整備事業が行われ、幅員19mの道路となった。そして、さらなる整備事業として「八丁道歴史的景観整備事業」を向かえることになった。

2. 調査に至る経緯

近年、その都市のもつ固有の文化、歴史を生かした街づくりや、うるおいと快適性をもたらした都市景観の創出が強く求められている。本市においても、うるおいのある生活環境の創出を総合計画の重点施策に掲げ、魅力ある都市景観づくりに取り組んでいるところである。

八丁道は、歴史性もあり、由緒ある道すじであることから、その景観形成には大きな関心が寄せられている。しかし、八丁道の所在するJR高岡駅南側地区の環境の変化は著しく、八丁道の名にふさわしい景観形成を図ることが望まれている。

このような中で、八丁道を「うるおいのある街の道すじ」として、景観形成することを目指として「八丁道歴史的景観整備事業」が計画され、実施に移されるに至った。

当初の計画では、昭和61年度に着工し、約5箇年かけて完了する内容であった。八丁道については、昭和10年代に土地改良事業が施行され、昭和20年頃に換地となった外、近年の駅南上地区画整理事業及び南部土地区画整理事業において、舗装のための土の入れ替えあるいは排水管理設備のための掘削等で、旧八丁道の遺存状態はよくないものと考えられていた。

昭和62年3月、県教育委員会より、前田墓所前に当時のままの石垣があること、八丁道近辺に当時の石垣の一部と考えられる石が散在していること等により、地下に石垣をはじめ旧八丁道の遺構が存在する可能性が強く、発掘調査の必要性の指摘を受けた。県・市教育委員会、県・市開係各課による協議が行われ、八丁道整備事業に先立ち、旧八丁道の遺存状況を確認し、整備計画との調整を図る目的で、試掘調査が実施されることになった。

この調査は、富山県埋蔵文化財センターにより、昭和62年5月7日から15日まで7日間実施された。調査地点は、前田墓所前2箇所の約15m²と、瑞龍寺付近くら保育園北側1箇所の約35m²である。この結果、それなりの遺構は検出されたが、範囲等が不足しており、追加調査の必要が生じた。その後、市教育委員会主体による、発掘調査を行うと言う協議がまとまった。そして、工事実施計画に合わせて、各年度ごとに発掘調査をすることに至った。

3. 発掘調査の経過

昭和62年度から平成元年まで実施した発掘調査の経過は次の通りである。

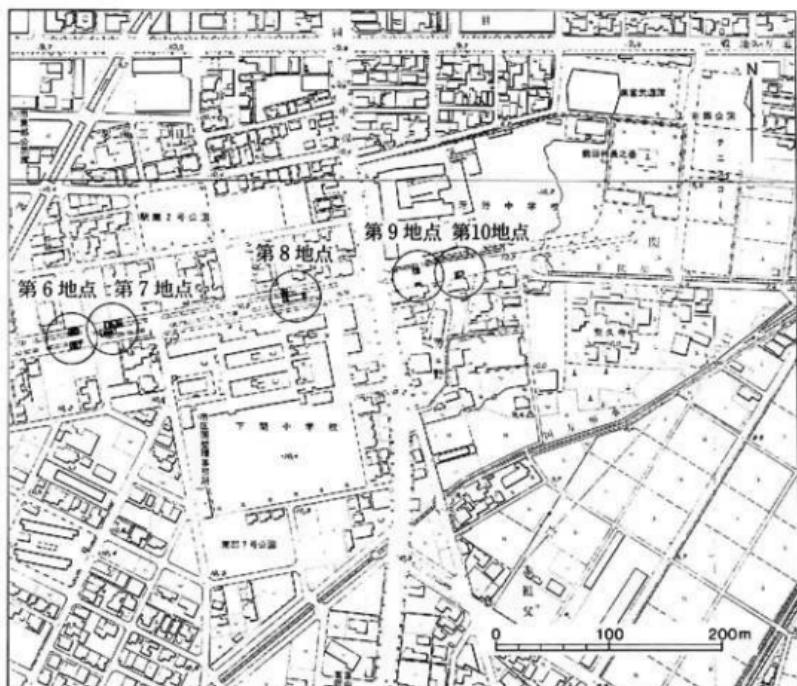
昭和62年度の調査対象地は、昭和62年度工事実施予定地である。これは瑞龍寺前より、前田墓所方向へ220m分であり、幅員が19mであるので、調査対象地は4,180m²となった。調査地点は4箇所設定し、瑞龍寺側を第1地点とし、前田墓所方向へ第2、第3、第4地点と呼称することとした。工事と併行しての調査であることと、現在使用されている道路と言う制約があり、2回に分けて調査を実施した。第1次調査は、昭和62年7月20日から24日まで5日間行った。第2次調査



第3図 調査地区位置図(1)(1/5,000)

は、9月7日から11日まで5日間行った。発掘調査面積は、第1次調査が 253m^2 、第2次調査が 150m^2 で、合計 403m^2 となった。

昭和63年度の調査対象地は、昭和63年度工事実施予定地である。下関・京田線より東側へ 250m 分、下関小学校の西側までである。幅員が 19m であるので、調査対象面積は $4,750\text{m}^2$ となった。調査地点は3箇所設定した。昭和62年度に引き続いた調査地点名を用いることにした。よって、瑞龍寺側(下関・京田線側)を第5地点とし、前田墓所方向(下関小学校方向)へ第6、第7地点と命名した。調査は工事と併行してのものとなった。現在使用されている道路と言う制約もあり、2回に分けて調査を実施した。第1次調査は側道部分を対象とするもので、調査期間は、昭和63年6月20日から7月7日まで9日間である。第2次調査は参道部分(道路の中央部分)を対象とするもので、調査期間は昭和63年10月3日から7日まで4日間である。発掘調査面積は、第1次調査が 243.7m^2 、第2次調査が 123.1m^2 で、合計 366.8m^2 となった。



第4図 調査地区位置図(2)(1/5,000)

平成元年度の調査対象地は、平成元年度工事実施予定地である。下関小学校の西側より、東側へ350m分、前田墓所入口までである。幅員が19mの部分と16mの部分であるので、調査対象面積は6,230m²となった。調査地点は3箇所設定した。昭和62・63年度に引き続いた地点名を用いることとし、瑞龍寺側を第8地点とし、前田墓所方向へ第9、第10地点と呼称することとした。調査対象地の中央部分を交差して、主要地方道—高岡・婦中線が走っており、第8地点はこの交差点の西側、第9・10地点は東側に位置する。第9・10地点の一部分は、昭和63年度に、下関雨水幹線建設に伴う調査事業として、発掘を実施しており(高岡市教育委員会『前田墓所遺跡調査概報Ⅰ』)、今回は残りの部分の発掘である。

今年度の調査は、工事に先立って実施した。ただし、現在使用されている道路と言う制約もあり、道路を一度に横断して調査地区を設定する形は取れなかった。調査期間は、平成元年5月10日から31日まで、15日間行った。発掘調査面積は188m²となった。

II 調査の概要

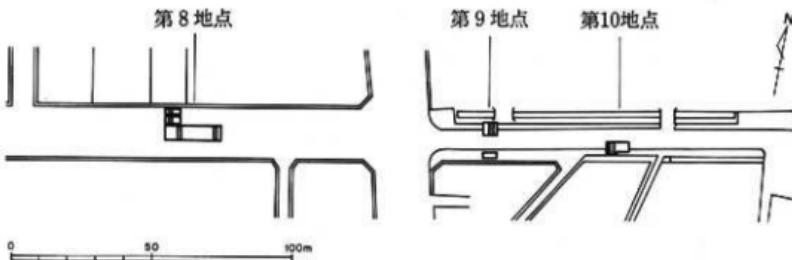
1. 各調査地点の設定

古絵図によれば、八丁道には用水・小河川が5・6条流れている状態となっている。また、内1条は瑞龍寺の外堀にかかるものとも受け取れるものとなっている。その中で、明和(1764年～1772年)、安永(1772年～1781年)年間作製とされる「高岡中古之図」によれば、瑞龍寺前も含め5箇所に石構造のものが確認し得る。一方、かって用水にかかっていたとされる花崗岩製の石板が、工事の時壊され現在瑞龍寺境内に残されている。古絵図に描かれた用水の内、一つは現在の四ヶ用水となっており、その他のものも、古絵図、近年の地図、現況と比較して、用水の場所を想定してみた。

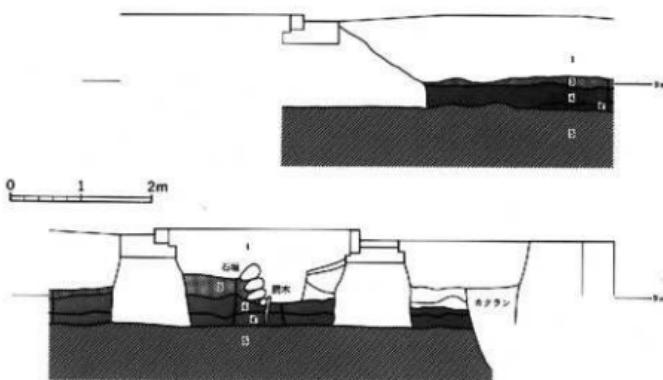
調査地点の設定に当たっては、八丁道の総体的把握を目指したことは言うまでもないが、用水の確認にも配慮した。

今回、平成元年度は調査地点を3箇所設定した。第8～10地点である。この地点名は昭和62・63年度に統くもので、瑞龍寺前を第1地点とし、前田墓所方向へ連番とした。第8地点は、下関小学校前で、用水の推定地である。第9・第10地点については、昭和63年度に下関雨水幹線建設に先立つ「前田墓所遺跡の調査」として、発掘した地点の隣接地である。この前田墓所遺跡の調査地点名として第1、第2地点と称した所である。今回の発掘と合わせて、この部分において、八丁道を横断する形での調査地区になるものとした。

昭和62年の4調査地点、昭和63年度の3調査地点、そして平成元年度の3調査地点と合わせて、八丁道に対して、10箇所のトレンチを穿った形となった。



第5図 調査地区配置図 (1/2,000)



第6図 第8地点土層断面図 (1/80)

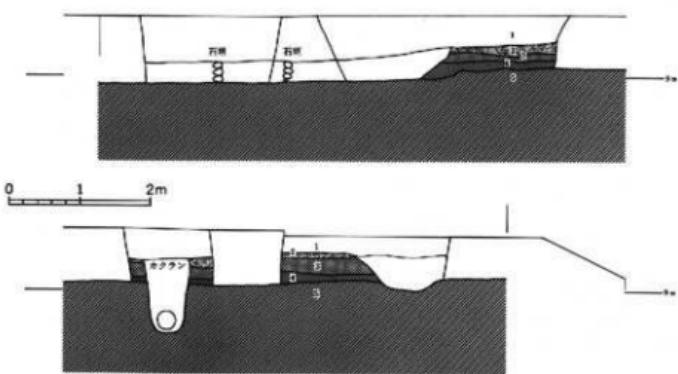
2. 第8地点

中央の参道部分と、植樹帯と側道とからなる側道部分に分けて調査を行った。側道部分は南北に存在するが、南側側道部分は、近年の大型排水管埋設工事によって破壊されていることが明白であったので、調査は省略した。参道部分は 100m^2 （幅約5.0m、長さ約20.0m）を発掘の対象とし、盛り土部分を除去した。この内、基盤層下までの掘り下げ部分は 6.7m^3 である。北側側道部分は、植樹帯と側道の間に走るコンクリート部分を撤去しなかったので、 14.4m^2 （幅約3.0m、長さ約4.8m）と 8.9m^2 （幅約1.9m、長さ約4.7m）との部分からなる。この合計 23.3m^2 を発掘の対象とし、盛り土部分を除去した。この内、基盤層下までの掘り下げ部分は 3.5m^3 である。

土層は基本的に他の地区と同様であるが、八丁道で一般的に認められる「第2層—灰色砂質土層」は存在しなかった。よって、以下の通りとなった。第1層—最新の盛土層、約60~88cm。第2層—ナシ。第3層—黒褐色粘質土層、約4~30cm。第4層—黒色粘質土層、約4~28cm。第4'層—暗褐色粘質土層、約10~18cm。第5層—基盤の淡緑灰色粘質土層。

中央部分では、大きく土砂の入れ替えが行われており。現在の路面下には最新の盛り土が厚く堆積していた。このため、第2層は存在しなかった。また、第3層上部も削平を受けているものである。中央部分西側は特に大きく掘削されており、基盤層の上に、約20~30cm程度、第4層の黒色粘質土層や第4'層の暗褐色粘質土層が存在していたのみであった。

北側側道部分では、植樹帯の下から石垣が検出された。胴木の上に人頭大の河原石を3段に積むものである。



第7図 第9地点土層断面図 (1/80)

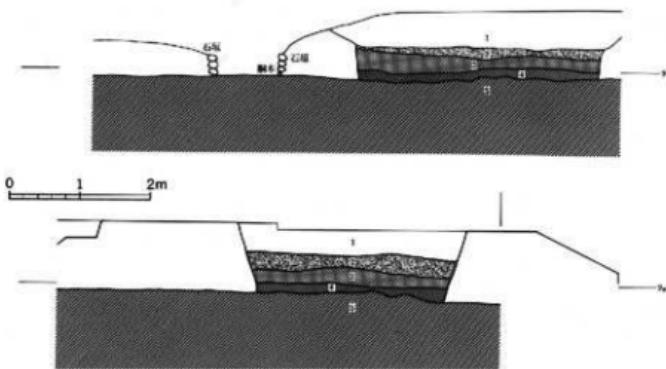
3. 第9地点

現八丁道の北部と南部を発掘した。中央部は昭和63年度に「前田墓所遺跡」調査の第1地点として実施した部分である。北方には用水を隔てて芳野中学校が位置する。北部は、 22.5m^2 (幅約4.5m、長さ約5.0m) を発掘の対象とし、盛り土部分を除去した。この内、基盤層下までの掘り下げ部分は 7.0m^3 である。南部は 9.7m^2 (幅約2.1m、長さ約4.6m) を発掘の対象とし、盛り土部分を除去した。この南部は石垣の部分に当たったため、専ら石垣の検出に当たり、基盤層下まで掘り下げなかった。

北部と中央部から覗える土層は以下の通りである。第1層—最新の盛り土層、約24~60cm。第2層—暗褐色砂質土層、約4~16cm。第3層—黒褐色粘質土層ないし黒灰色砂質土層、約10~22cm。第4層—黒色粘質土層ないし暗黒灰色粘質土層、約8~26cm。第5層—基盤の淡緑灰色粘質土層。

北部の北側、すなわち芳野中学校側は、上記の各土層に類似をしてはいるが、若干乱れたものとなっていた。これは、以前八丁道にあった樹木のためと考えられる。

南部からは石垣が検出された。これは八丁道の南側に沿って走る側溝の石垣である。側溝の石垣は両方 (八丁道側=内側と、民家側=外側) に構築されているが、検出した部分は外側のものである。内側のものは、中央部発掘区と南部発掘区の間の未調査部分に位置しており、これについては、建設工事の時の「立ち会い」で確認した。この「立ち会い」で確認したものも、いままで検出した石垣と同様なものであった。



第8図 第10地点土層断面図 (1/80)

4. 第10地点

現八丁道の南半部を発掘した。北半部は昭和63年度に「前田墓所遺跡」調査の第2地点として実施した部分である。第9地点同様、北方には用水を隔てて芳野中学校が位置する。この南半部は、 32.8m^2 (幅約4.8m、長さ約3.5mと幅約3.4m、長さ約4.7m) を発掘の対象とし、盛り土部分を除去した。この内、基盤層下までの掘り下げ部分は 4.5m^3 である。

土層は次の通りである。第1層—最新の盛土層、約28~52cm。第2層—灰色砂質土と褐色砂質土との混合土層、約8~28cm。第3層—暗褐色粘質土層ないし暗灰色砂質土層、約10~32cm。第4層—黒色粘質土層、約8~10cm。第5層—基盤の灰色砂質土層。

北半部の土層は、先に報じた通り、第1層の最新の盛り土層から基盤の層まで、この間に3つの土層が介在している。今回、南半部の調査結果を考慮して、北半部の第2層の灰色砂質土層・褐色砂質土層と第3層の暗褐色砂質土層・暗灰色粘質土層を合わせて、南半部検出の第2層と対応させた。これによって、北半部の第4層は第3層へ、北半部の第5層は第4層へと整理しておくこととする。

第8図では、やや単純化して図示したが、北半部の北側は、他の部分に比べて土層が複雑なものとなっている。これについては、第9地点と同様、樹木のためと考えられる。

南半部の発掘区の南側には、八丁道の南側に沿って走る側溝の石垣の内、内側のものが認められる。そして幅約1mの溝を介して、民家が位置している。古い溝と石垣が現在まで続いているものである。

III 結語

昭和62年度から平成元年度までの調査より窺える、八丁道における基本土層とその性格は、次の通りである。

第1層：砂礫層、近年における道路改修等の造成土。

第2層：灰色砂質土層ないし暗褐色砂質土層、旧八丁道の造成土。

第3層：灰黒色粘質土層ないし黒褐色粘質土層、旧八丁道の造成土。

第4層：黒色粘質土層、旧表土。

第5層：青灰色粘質土層ないし淡緑灰色粘質土層、基盤層。

上記の土層内容の理解や、昭和63年度・平成元年度の年にわたって実施した、前田墓所遺跡関連の調査等を通じて、八丁道の変遷は以下のとおりであったものと判断される。

第Ⅰ期：江戸時代前期、黒色粘質土層の上に灰黒色粘質土等を盛って造成。

第ⅡA期：江戸時代末期から明治時代、北側へ拡幅、灰色砂質土等を盛って造成。

第ⅡB期：明治時代末期から大正時代初期、道路の両側を石垣で改修。

第Ⅲ期：昭和時代－戦後、砂礫土を盛って造成。

上記の内、第ⅡB期にあたる改修－特に明確な形となっているのが石垣の構築である－は明治末年頃の、瑞龍寺による八丁道の買戻し、地目変更、皇太子（大正天皇）の行啓等、一連の動きの中で造成されたものと理解している。また、大正2年に古城公園等の整備と共に、八丁道の整備も図られたとされている。

第ⅡB期の石垣については、一部は現在も露呈しており、また、3箇年にわたる八丁道の調査において、調査地点の各所で、原位置を保った形であるいは一部の破壊を受けた形で、現在の路面下から検出され、11m幅の参道であったことが判明している。

この第ⅡB期の改修事業は、八丁道の変遷を考える上で一つの定点となるものである。これを基準に、これより古い造成土と考えられる土層を、旧八丁道にかかわるものとして、第Ⅰ期や第ⅡA期として、八丁道の段階を設定した。また、第Ⅰ期八丁道は7～8m程度の参道であったと想われる。

旧八丁道の構築にかかわる個別具体的問題として、用水・小河川の位置の問題と、路肩部分の造成内容を取り上げてきたところである。

今回の第8地点は、用水の推定地に設定した。しかし、この地点の調査では、それに該当するものが検出できなかった。

路肩の造成については、石垣等をもって特別な造作を行ったと言う知見は、今回も得ることができなかった。



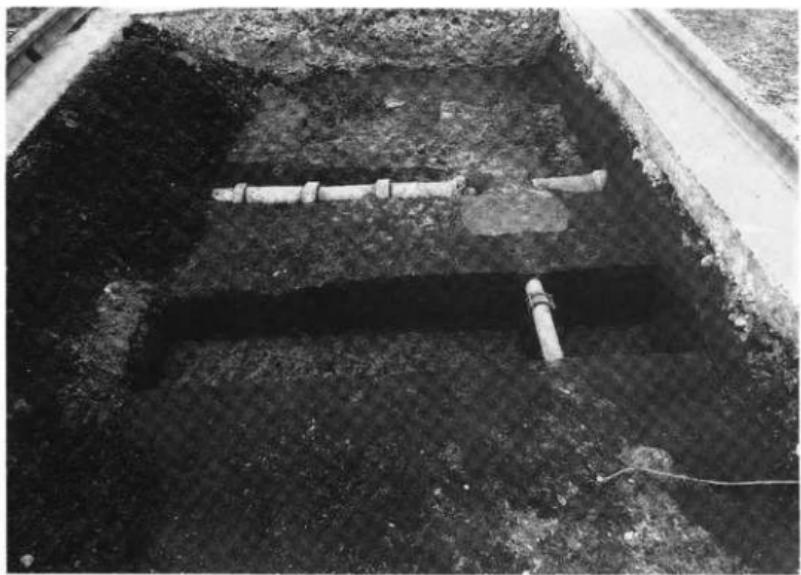
1. 第8地点参道部全景（西）



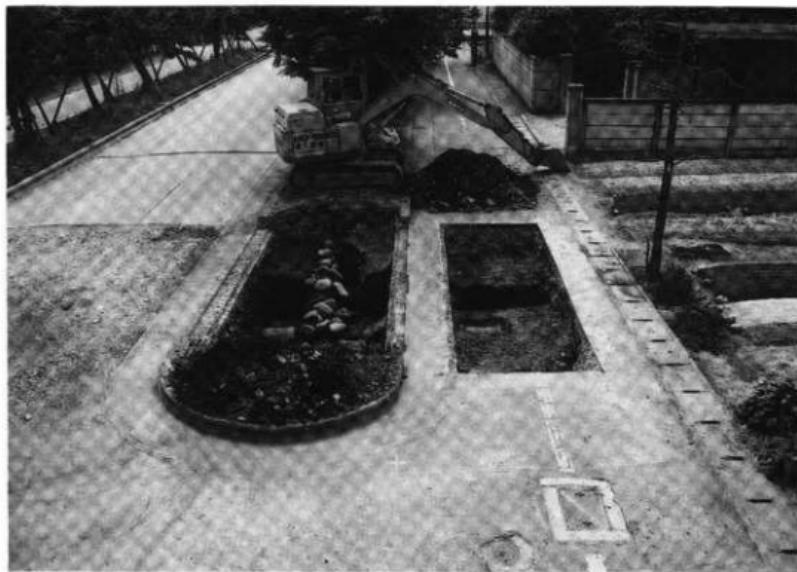
2. 第8地点参道部全景（北東）



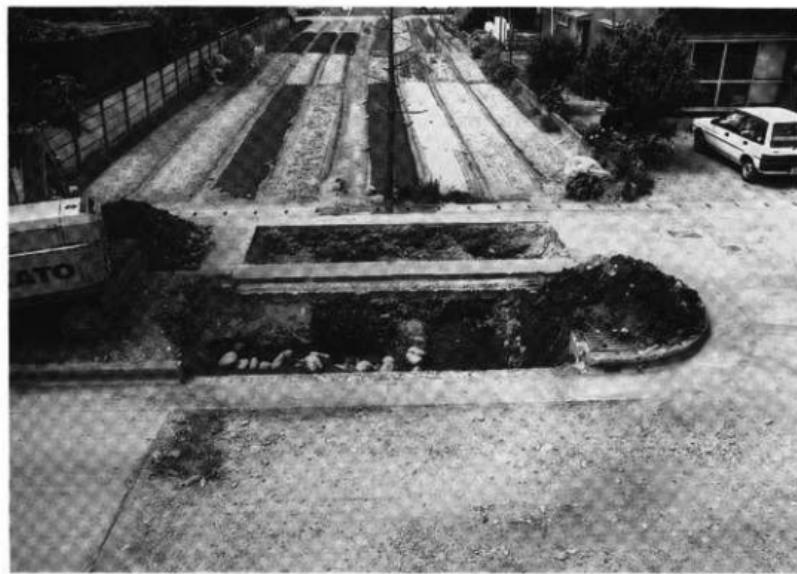
1. 第8地点参道部近景（南東）



2. 第8地点参道部近景（東）



1. 第8地点北側側道全景（東）



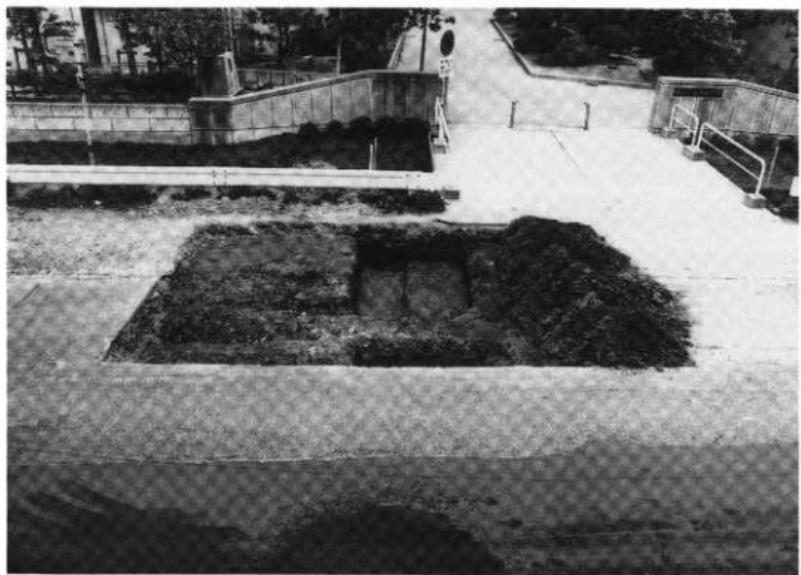
2. 第8地点北側側道全景（南）



1. 第8地点北侧侧道近景（北東）



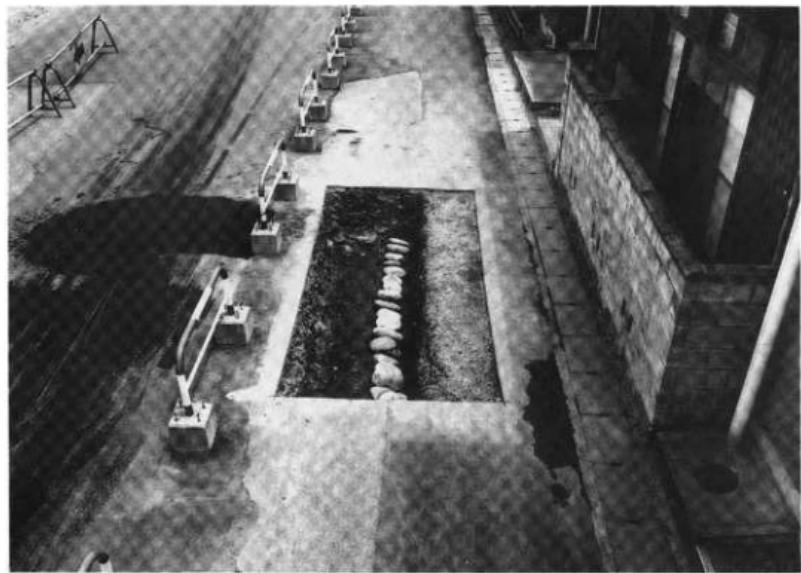
2. 第8地点北侧侧道近景（北）



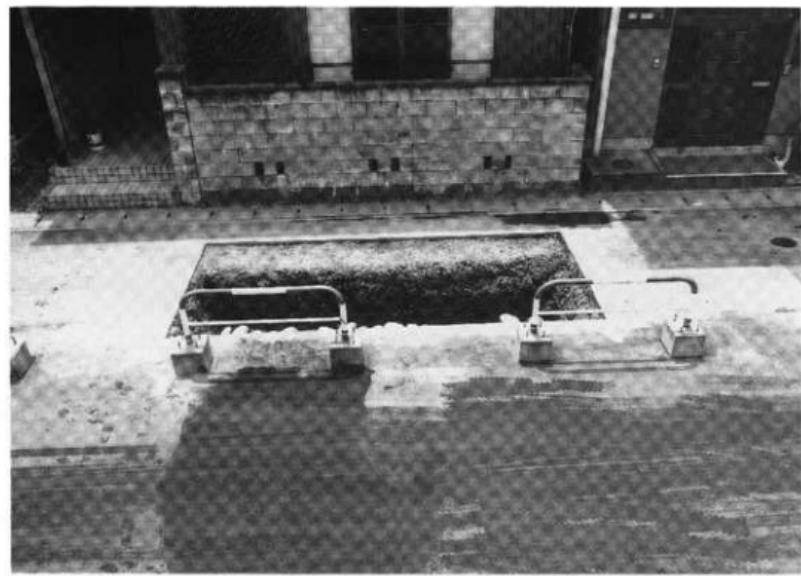
1. 第8地点北部全景（南）



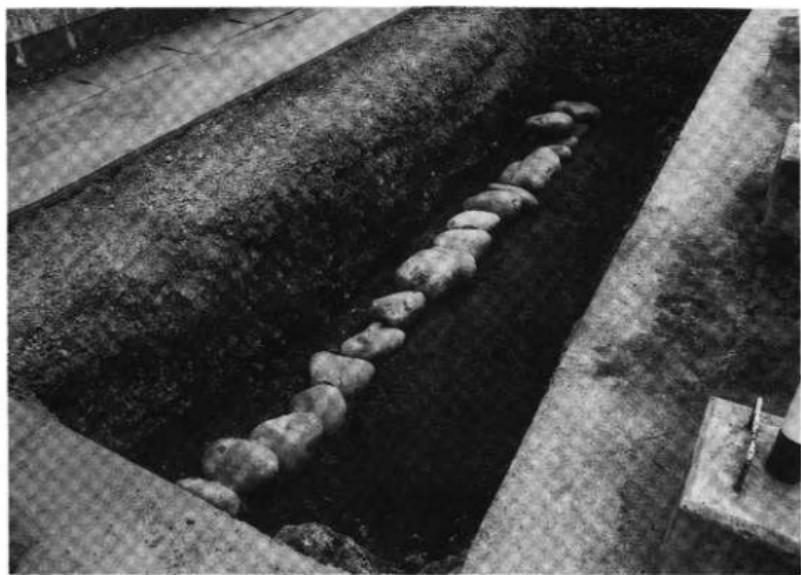
2. 第8地点北部近景（北東）



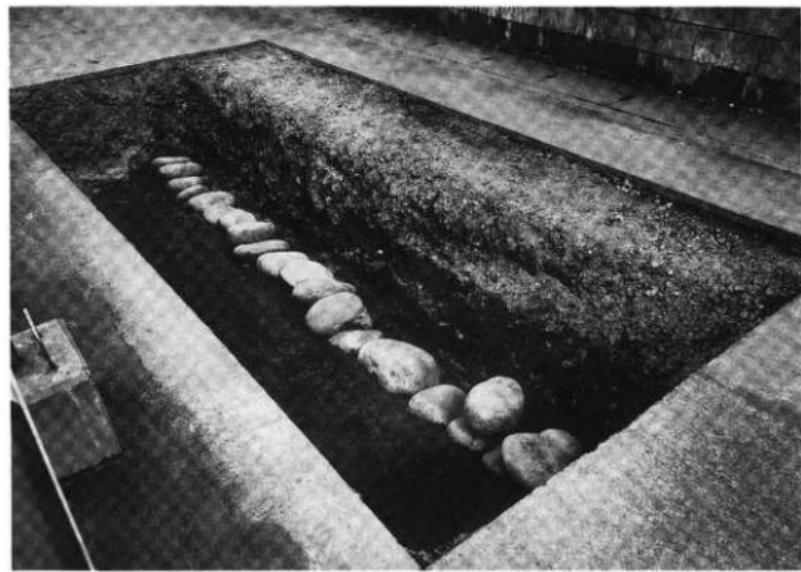
1. 第9地点南部全景（西）



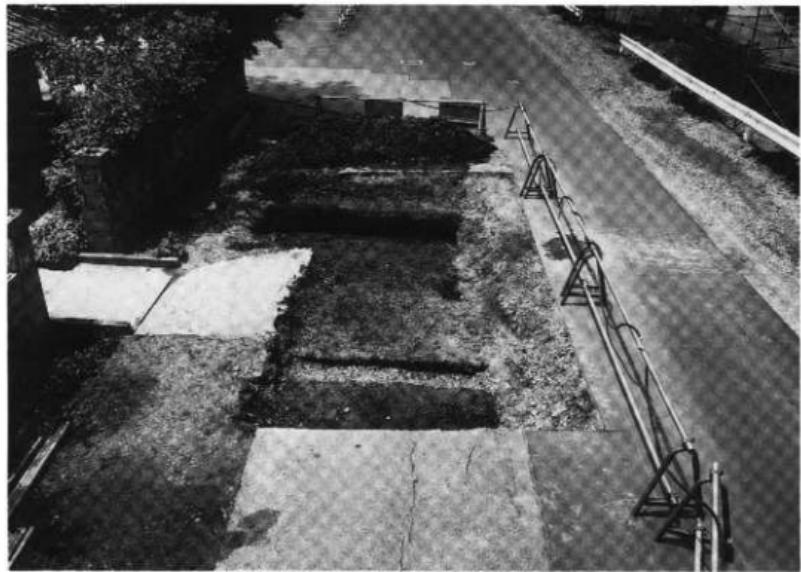
2. 第9地点南部全景（北）



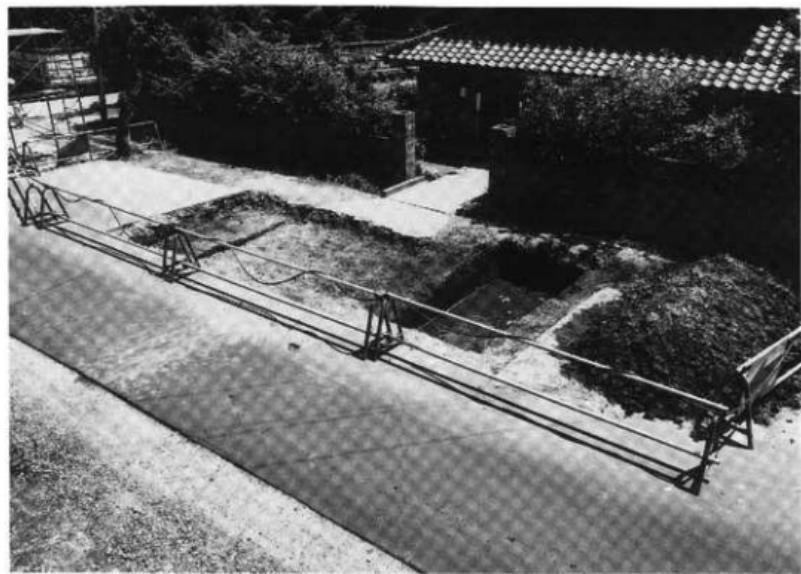
1. 第9地点南部近景（北東）



2. 第9地点南部近景（北西）



1. 第10地点南半部全景（東）



2. 第10地点南半部全景（北西）

高岡市埋蔵文化財調査概報第13冊

八丁道遺跡調査概報Ⅲ

1990年3月31日

発行者 高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7-50
印刷所 小間印刷株式会社
富山県高岡市利屋町3

